

『貧交行』 杜甫

貧交行 杜甫

貧交行

杜甫

翻手作雲覆手雨

手を翻せば雲と作り手を覆せば雨

紛紛輕薄何須數

紛紛たる輕薄何ぞ數うるを須いん

君不見管鮑貧時交

君見ずや管鮑貧時の交わり

此道今人棄如土

此の道今人棄てて土の如し

〔語句〕

紛々 入り乱れるさま。

輕薄 人情の薄い。

何須數 数える必要もない問題にしない。

君不見 あなたはご存知ありませんか(きつとご存知でしょう)。一種の慣用句。

管 鮑 春秋時代に斉の桓公に仕えた名相管仲とその親友鮑叔。

## 【解釈】

手のひらを上に向ければ雲となり、下に向ければ雨となる。このように忽ち形勢が入り乱れ、くるくると変わる人情の軽薄さは多すぎて数え立てて問題にするまでもなく、お話にならない。

あなたはご存知ありませんか（きつとご存知でしょう）あの管仲と鮑叔との貧乏時代の友情深い交際を。こうした立派な人の道を、今の人たちは土くれのように捨て去ってしまっている。

## 【作者】

作者については「悠久の名詩」シリーズの3・4・8・9・36・43・48に詳述されているのでここでは四十一歳前後の年表で紹介する。

七四一 三十歳

南方の旅から帰り、洛陽に暮らす。  
（三十四歳まで）

このころ楊氏と結婚する。

七四四 三十三歳

祖母死す。李白・高適こうせきらと河南に遊ぶ。

七四六 三十五歳

長安に出る。

七四七 三十六歳

特別任用試験を受けるも、時の権力者、  
李林甫りりんぽによって落第りだいさせられる。

七四八 三十七歳

有力役人、韋済いさいに詩を贈り、引立てを

要請する。玄宗は貴妃の三姉にみな国夫人の称号を与える。

七五〇 三十九歳

長男宗文が生まれる。

七五一 四十歳

「三大礼の賦」を献上し、一時役職にあずかる。

七五二 四十一歳

李林甫死し、貴妃の兄楊国忠ようこくちゅうが宰相となる。玄宗は政治に怠うむ。（このころ「貧交行」できる）

七五三 四十二歳

職もなく生活困窮。次男宗武誕生。

七五四 四十三歳

家族を奉県に疎開させる。

七五五 四十四歳

官位の低い武器倉庫番に採用。

## ○個人的悲憤か

### 唐政に対するそれなのか

この作品は七五二年、四十一歳のころのものと思われる。杜甫は仕官を求めて長安に上ったが、科挙の試験に及第せず、最初の挫折を味わう。それでも貴人を通じて己の才能を売り込めば仕官の道もあったので、杜甫は自分の政治的才能を記し、文才を詩に託して、いやらしいほどに仕官の道を得ることに執着したのに、ことごとく門前払いに遭い、周囲の人々の人情の冷たさに憤りを感じたことは十分推察される。その思いがこの詩に込められている。

しかしこの詩を周囲の特定の個人への悔しさを標的に作ったものととらえたり、己の生活苦を他人のせいにして、いる恨み節の一種と考える説もあるようだが、鑑賞者として、それは未だしである。彼の憤りの対象は広く世間一般の人間に対してであろう。今も昔も人情の軽薄さは塵のごときことを考えれば、十分納得できる詩である。

さらに踏み込んだ見方もある。七五〇年代と言えば玄宗は楊貴妃の妖艶さに心奪われ、政治的才能は未知数なのに、貴妃の一族のひとりである楊国忠を宰相に抜擢した。

一方で着々と唐帝国の奪還を狙う安祿山の不気味な行動を知ってか知らぬか、玄宗は離宮の華清池で貴妃と温泉愛におぼれている。その情報に杜甫の耳にも届いていた。このあたりの不快感は「京より奉先県に赴く詠懷五〇〇字」と題する杜甫の詩に詳しい。

「この道今人棄てて…」の「今人」とは玄宗を含めて政府高官を指しているのではないか。「玄宗皇帝さまは開元の治のころのように、万民の生活の安定と幸せを願った政治をなさったではありませんか。それなのにどこで手のひらを返すように心変わりをなさったのでしょうか。」と心の中で叫びながらこの詩に思いのすべてを託している。

政治家への深い失望感を表わす詩ととらえることもできるのではないか。

## ○「史記」に詳しい

### 「管鮑の交わり」

（現代語訳）「管仲夷吾は潁上の人である。若い時常に鮑叔牙と遊んだ。鮑叔は彼の賢さをよく見抜いていた。管仲は貧しく常に鮑叔を欺いていた。でも鮑叔はどこまでも善意を持って接し、一言も非難めいたことは言わなかった。やがて鮑叔は齊の公子である小白に仕え、管仲は公子の糾に仕えた。小白が王位に就き、桓公と為ると、糾が死んで、管仲は囚われた。

その折、鮑叔は管仲を重臣に取り立てた。

（中略）管仲が言うには『私は以前生活が苦しい時、鮑叔と商売し、もうけを多く取った。しかし鮑叔は私のことを貪欲と言わなかった。私の貧しさを知っていたから。』

私は昔、鮑叔のためにある計画を企てたが却って彼は行き



詰まった。しかし鮑叔は私のことを愚か者と言わなかった。それは時には運不運というものがあることを知っていたからである。また嘗て三たび主君に仕え三たび主君から追放された。その時も鮑叔は私のことをできの悪いものと言わなかった。私が良い時に恵まれなかったことを知っていたからである。

さらに三たび戦場に出て三たび逃げ帰った。鮑叔は私のことを卑怯者と言わなかった。私には老いた母がいることを知っていたからである。

公子糾が死んで重臣の召忽がまた死んだとき私は牢に閉じ込められ屈辱を受けた。鮑叔は私のことを恥知らずと思わなかった。なぜなら私が小さな節義よりも生きながらえた後に天下に功名を挙げる人物とならないことを恥とする人だと知っていたからである。

私を生む者は父母だが私を真に理解してくれているのは鮑叔さまである」とあって、管仲と鮑叔の交際は、実に水魚の交わりのように親しかったというのが定説となっている。

### ○生誕の地は洞窟であった

新幹線の「洛陽龍門駅」を降りバスで約一時間走ると杜甫の生誕地「杜甫故里」に着いた。広大な公園になっていて、門を入ると高さ三メートルほどもある大きな杜甫像が

迎えてくれた。

さらに数分歩くと彼が少年時代を過ごしたであろう平屋の建物が復元され、木登りをして遊んでいく彫刻めいた実物大の造形物が庭に作られていた。そしていよいよ生誕の地に案内された。それは想像を外れ、なんと洞窟であった。目測だが高さ四メートル幅三メートル奥行き十四メートルで、煉瓦で囲まれていた。

杜甫は中流家庭の生まれで、幼少のころから貧しかったわけではないので、極貧を連想させる「洞窟」と聞いて驚いた。ガイドさんの説明にはなかったが、おそらくそれは貧しさのためではなく、お産だけは日本の古い習慣にもあるように、穢れを避けてこういう別室で営まれたのであると勝手に想像した。

(平成二十八年総本部の中国吟行に同行して)



【参 考】

この詩と同趣の詩に唐の張謂の絶句「長安主人の壁に題す」(A 48—1)や王維の律詩「酒を酌んで裴に與う」(B 17—2)がある。

「長安主人の壁に題す」

世人交わりを結ぶに黄金を須<sup>もち</sup>う  
黄金多からざれば交わり深からず  
縦<sup>たと</sup>令然諾して暫く相許すも  
終に悠悠行路の心

「酒を酌んで裴に與う」(前半のみ)

酒を酌んで君に與う君自ら寛うせよ  
人情の翻覆波瀾に似たり  
白首の相知猶剣を按じ  
朱門の先達彈冠を笑う

